S. Ashina

＊自然神学の社会科学への拡張

１．自然神学とその歴史的展開

２．自然神学の拡張と科学論

２－１：聖書の社会教説　　２－２：聖書の経済・環境思想

２－３：聖書の政治思想　　２－４：自然神学から社会科学へ

２－５：キリスト教思想と科学技術　　1/5

２－６：キリスト教思想と生命　　1/12

２－７：キリスト教思想と脳科学　　1/19

＜前回＞聖書の政治思想

（１）キリスト教と国家

１．単一の国家論を導き出すことはできない。古代：迫害から国教化、敵対から協調
　キリスト教は事実上、あらゆる形態の政治体制下で存在してきた。

２．国家、教会、神の国の三者関係
　↓
アウグスティヌスの『神の国』（岩波文庫）：地の国と神の国の二原理によって、歴史は規定される。国家にも教会にも、これら二つの原理が作用している。

（２）新約聖書の国家論

３．イエス：論争における国家への言及→多様な解釈が可能、政教分離？

・マルコ　12:15 イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」16 彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、17 イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。

４．ヨハネ黙示録：迫害下の教会　→　国家との敵対関係

・ヨハネ黙示録　13:15 第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。16 また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。17 そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。18 ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である。

５．パウロの意義：市民社会のキリスト教、国教化以降の状況との合致

・ローマ　13:1 人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。・・・7 すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。

（３）近代の社会主義思想

６．社会主義とは、近代以降に登場した広範な諸思想・諸運動を含む理論群に対して用いられる包括概念である。

７．近代（啓蒙主義と産業革命以降）の社会変動に対する応答

近代自由主義・資本主義の進展の諸矛盾（貧困、劣悪な労働環境）を、近代の徹底化によって克服することをめざす。人間的生の全体における自由と平等（政治的平等から経済的平等へ）を内容とする道徳的正義と幸福の理念の実現をめざす。

平等主義、相互主義、国際主義

（４）キリスト教社会主義とその背景

１．近代自由主義・資本主義の問題性

貧困問題と労働問題

３．アメリカの「社会的キリスト教」：1880 年代、アメリカの神学校を中心に生じた運動。

片山潜（1859-1933）が留学したアンドヴァー神学校。

１９世紀後半のアメリカ合衆国の問題は、貧困問題と労働問題であり、資本主義の発展にもかかわらず深刻化

・アメリカにおける社会問題の拡大とこれに対して無関心なキリスト教への批判・反省、近代聖書学の発展によって崩れ去った聖書の無謬説に代わる、新しい神学建設の要請。

・神の内在性の強調：進化の中に神の内在を認める、宗教は世俗世界に直接関わり、宗教の目標は地上における良き生活（神の国）の実現に置かれる。

・罪人としての人間観の否定：人間の不完全さや欠陥は、理性によって改善可能である、その原因は社会的矛盾にある。

・罪の責任は個人にではなく社会にある：隣人に対する自由な奉仕の象徴としてのキリストの十字架、キリストの愛を強調。

↓

キリスト教社会主義者としての片山潜

４．イギリスにおけるキリスト教社会主義

19 世紀の社会改良運動

J.M.F.Ludlow、F.D.Maurice、C.Kingsley、Thomas Hughes

組合運動（職能別組合、消費組合）

労働者教育（隣保館・セツルメント事業、モーリスの労働者大学）

（５）日本におけるキリスト教社会主義

４．まとめ・評価

・武藤一雄『宗教哲学』日本ＹＭＣＡ同盟出版部、1955 年。

「われわれにとって今日特に関心を唆られるのは、第一次世界大戦後のティリッヒやニーバーによって提唱されつつあるキリスト教社会主義であって、そこには従来の所謂キリスト教社会主義の福音信仰を逸脱する「社会的福音」の立場と呼ばれる安易な楽天的な内在主義に対する厳しい批判的態度が見られる。そしてそれがバルト神学の超越主義と既往の自由主義的なアングロ・サクソン神学とに対決するという意味をもっている点で注目され

る。」(27)

・理想主義から現実主義へ。しかし、いかなる現実主義か？

ティリッヒの現実主義理解

現実(the real)とは、歴史的現実を構築する力である。

素朴現実主義、理想主義、現実埋没的現実主義、信仰的現実主義

信仰におけるイデオロギーとユートピアの未分化

イデオロギーとユートピアの分離・分裂

分離・分裂の再統合

２－４：自然神学から社会科学へ

（１）自然神学から社会科学へ

＜問題＞

自然神学が、他者とのコミュニケーションの可能性あるいは公共性に関わるものであるならば、それは、「キリスト教思想と自然科学」という問題領域に限定されないはず。

自然科学から、社会科学そして人文科学へ

キリスト教から、諸宗教へ

↓

今後の方針。まず、「キリスト教思想と社会科学」からはじめる。

社会教説：環境と経済、政治

１．マクグラス：キリスト教から諸宗教へ、自然科学を超えて

Alister E. MacGrath, *Science & Religion. An Introduction*, Blackwell, 1999.

（マクグラス『科学と宗教』教文館）

As we have noted, this question has to be addressed with particular reference to Christianity, on account of the emergence of the natural sciences within the specifically Christian context of western Europe. Nevertheless, the discussion can be broadened out beyond this specific religion. (51)

The importance of being aware of differences between the religions when discussing the theme of "science and religion" can be seen by considering Sigmund Freud's account of the origins of religion in primitive peoples. Freud's argument（which we shall explore at pp.210-5） focuses on God as an idealized father figure.（177）

We have chosen three quite distinct areas of scientific research for this purpose, each of which has religious significance: physics and cosmology, in which we shall focus on some aspects of modern cosmological thinking; biology, in which we shall consider the impact of various forms of Darwinianism on religious thought; and psychology, in which we shall look at various approaches to understanding the origins and significance of religion.（178）

↓

・キリスト教と物理学・宇宙論、キリスト教と生物学・進化論（→遺伝子工学）

キリスト教と心理学

・心というリアリティ（精神分析学、認知科学、脳神経科学）

↓

社会科学へ？

２．唐沢かおり・戸田山和久編『心と社会を科学する』東京大学出版会、2012 年。
「「心と社会を科学する」はずの社会心理学がどのような学問なのかを分析した上で、科学哲学・社会心理学両方の視点から、その可能性を論じること」(1)
「社会心理学は「社会」という言葉を関している以上、社会、集団、組織など、人の集まりに対する興味関心が研究の重要な部分をなしている」(6)が、「社会心理学は「社会や集団の心」ではなく、「個人の心」を対象としている。それは、個人からデータを取り、それをもとに個人の心について語るという、個人焦点の方法論に支えられていると同時に、そのような方法を採用していることの必然的な帰結でもある」(6-7)、「そのような「集団の心(group mind：集団心)」という考え方を積極的に否定してきた歴史を持っている。」(7)
「データ収集が行いやすいと同時に、日常概念を用いた直感的に理解しやすい心のモデルの作成を可能にする。研究仮説を生成し、データを集め、それを統計的に分析して、結果に基づいてモデルを作るという、一連の研究の流れは、個人焦点の方法論により、効率よく進んでいく。」(7)
「しかしである。」
「おもしろい議論の可能性を見逃してきたということもありそうだ。」
「個人焦点の方法論の問題点とは何か。」(8)
「社会心理学の方法論を実り豊かな拡張のため」(9)
↓
「心と社会」という問題連関を積極的かつ実質的に論じることが必要である。
社会科学との接続は当然あるべき問題意識である。
従来の「心＝アトム的個」の集合体モデルの限界。心と社会との関係（「われ―われわれ」の関係）ははるかに複雑（従来のモデルはその粗雑な近似。社会はアトム的個に還元できない)。創発性概念に注目。→「１３」

（２）社会科学との接点を求めて、多様な試み

３．キリスト教神学と社会科学（１）
日本キリスト教団出版局・社会科学叢書
鵜川馨『イギリス社会経済史の旅』
森岡清美『家の変貌と祖先の祭』(1984)
住谷一彦『近代経済人の歴史性と現代性』(1984)
永岡薫『デモクラシーへの細い道――イギリスと日本』(1984)
弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』
「刊行のことば
キリスト者は、生活のさまざまな場において神に召されて生きている。社会科学者であることを自らのベルーフ（召命＝職業）とするキリスト者も、我が国の場合、明治以降今日に至るまでに数多く輩出している。キリスト者が同時に社会科学者たろうとするとき、自然科学の場合と同様に、信仰と科学との間に置く身の内的葛藤にいかに耐えるかが宿命

となる。もとよりキリスト教的自然科学がないのと同じく、キリスト教的社会科学もあり得ない。しかし、キリスト者の眼が社会科学を通じて現代という時代を、あるいは広くさまざまな時代の歴史を、どのように把えてきたか、あるいは把え得るかは、学問的にも思想的にも一つの問題提起たり得るであろう。本叢書は社会科学の専門分野で業績を挙げているキリスト者が、自らの学的関心の赴くままに得られた成果を世に問うことを目指している。現代を、歴史を思う読者の関心に応えるべく刊行を意図した次第である。」

４．キリスト教神学と社会科学（２）、キリスト教神学と社会学（知識社会学）

Robin Gill, *Theology Shaped by Society. Sociological Theology*. Volume 2, Ashgate, 2012.

Part I is concerned with theology seen through the gaze of the sociology of knowledge. The first three chapters expand upon material from the long-out-of-print Theology and Social Structure. The next two chapters refashion chapters from the equally out-of-print Competing Convictions. In these chapters and others it was important to reflect some of the developments by recent theologians using sociologists such as Niklas Luhmann, Michel Foucault and Pierre Bourdieu. Part II is concerned with mission shaped by social change. It returns to York which I first studied in The Myth of the Empty Church and then in The 'Empty' Church Revisited, but there are some very radical changes here. Recent ethnographic and congregational studies of York churches have produced fascinating challenges that need to be taken fully into account. Part III is concerned with the different ways that music can shape, texture and even enhance theological convictions. Here I return to（with permission from Cambridge University Press）and reframe a study of hymns that I previously attempted in Churchgoing and Christian Ethics, followed by a very recent study of the different ways that music more generally might help to illuminate the theological task. （3-4）

Theology as Mere Ideology: Karl Marx / Frederick Engels（The German Ideology）

Theology as General Ideology: Karl Mannheim（Ideology and Utopia）, Max Scheler, Parsons, Merton

Theology versus Ideology: Werner Stark, Berger and Luckmann

Theology as Socially Conctructed Reality: Berger and Luckmann, MacIntyre, Habermas, Ninian Smart,

Critical Theory and Power: Berger, John Milbank, Foucault, Jeremy Carrette

↓

リクール『イデオロギーとユートピア』！

５．キリスト教神学と社会科学（３）、エスノグラフィーと神学

Christian Scharen, Aana Marie Vigen（eds.）, *Ethnography as Christian Theology and Ethics*, Continuum, 2011.

６．土肥昭夫『天皇とキリスト　近現代天皇制とキリスト教の教会史的考察』

新教出版社、2012 年。

「日本のキリスト教は、歴史的にも本質的にも、日本の社会と文化にとって異質なもので

あった。それ故にこれに衝撃を与える可能性を内包していた。しかしこの中に組織として存続し、拡大しようとしたとき、天皇制の精神的、政治的構造の中に自己を位置づけ、それに対する自己の有効性を弁護し、そのうちにこの支配体制にのみこまれていった。しかし、キリスト教の大勢から少し離れたところで活動する人たち、上を向いたり、中央に向かって進まないで、むしろ下を見つめ、辺境をわたり歩く人たちがいた。あるいはおのれを直視して内に沈潜する人たちもあった。こういう人たちの中にキリスト教の衝撃的性格に身震いして、これを生きようとめざす生き方があらわれた。また下積みになったり、中央より離れているがために加速度的に風当たりを強く受けて生きる民衆に出会うことによって、その視座から物事を考え、行動することを学んだ人たちも出て来た。彼らは天皇制になじまぬ非天皇制的自己を見出し、そこから脱出しようとした。さらにはそこから出発して、天皇制に対する不服従、批判の自立的姿勢をとる少数の人たちもいた。」(68-69)

９．地域教会史論（『歴史の証言　日本プロテスタント・キリスト教史より』）

「二つの課題」「一つはキリスト教あるいは教会の自己同一性の問題である。ある地域に導入され、受容され、理解されたものがキリスト教でないならば、その歴史はキリスト教史にならない。そこで、そこにあるキリスト教あるいはそれを担う教会の内実が問われる。」(10)、「地域教会史のもう一つの課題は地域性である」、「日本を事例としていえば、日本そのものが独特な自然と歴史をもつ地域である。それとともに、その日本は諸地域の集合体でもある」、「日本というワン・パターンな地域像」、「しかし近代以前の歴史は近代以降より遙かに長い。その中で育成された伝統や慣習、価値観は近代に層となって息づいている」(11)、「東北、北陸、山陰といった地域の教会史」(12)

「地域教会史は、ヨーロッパ、アジアなどの各地、その中に日本といった地域で生まれ、育成された教会の歴史のことである。特に近代以後はそれぞれの地域で固有の歩みがみられる。そこでキリスト教ないし教会の自己同一性と地域性の交錯した地域教会史には、人文科学、社会科学を駆使し、これに神学的な検討を加えた研究が必要になるのである。」(12)

７．キリスト教自然神学の展開・拡張における「キリスト教思想と社会科学」

・キリスト教的知を規定する社会性

　　イデオロギー批判、知識社会学

　キリスト教的知の構成要素としての社会性

　　知の複合性　→　多様な方法論の連携

　心と社会、そして宗教の関係性をめぐる理論構築

・焦点としての「環境と経済」

　　キリスト教にとっての世界（「神の家族」の拡張）

　　↓　　Eph 2:19：oivkei/oi tou/ qeou

　　「家」としての世界

　　oikos

　　世界についての二つの学：eco-logy、eco-nomy

・オイコスの問いとしてのオイコノミア

三位一体とオイコノミア
・オイコノミアと政治の区別
古典的ギリシャの枠組み　→　キリスト教へ
ジョルジョ・アガンベン『王国と栄光――オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社。

８．「オイコノミア」（経綸）と政治神学：統治の二重構造、近代の統治機構を源泉に遡って理解すること(「ミッシェル・フーコーによっておこなわれた統治性の系譜に関する研究の延長線上に位置している」→系譜学、ギリシア哲学から教父思想へ)。
「本研究は、西洋において権力が、「オイコノミア(oikonomia)」という形、つまり人間たちの統治という形を引き受けるようになった、その様態と理由の様態と理由の数々を探究しようと提案するものである」
「三位的オイコノミアという装置が、統治機械の機能と分節化――内的分節化と外的分節化――を観察するにあたっていかに特権的な実験室たりうるかを示す」(9)
「統治機械の二重構造」「権威(auctoritas)と権力(potestas)」「オイコノミアと栄光」「権力はなぜ栄光を必要とするのか？」
「これらの問いを神学という次元へと回復してやることによって、西洋の統治機械の最終的構造がオイコノミアと栄光のあいだの関係のうちに見分けられるようになる」(10)
「権力の中心的な秘密」、「喝采や栄光の機能は、世論や同意といった近代的な形で、現代民主主国家の政治装置の中心に依然として位置を占めている」、「同意による統治(government by consent)」(11)

９．政治神学 対 オイコノミア神学（ポリスとオイコス）：オイコノミアと生の秩序
「テーゼの一つ」:「広い意味での政治的パラダイムが二つ、キリスト教神学に由来している」「互いに相反するが、機能上は互いに結びついている」、「一つは政治神学である。これは、単一の神において主権的権力の超越性を基礎づける。もう一つはオイコノミア神学である。これは、主権的権力の超越性の代わりにオイコノミアは神の生の秩序であれ、人間の生の秩序であれ、内在的秩序――狭義の政治的秩序ではなく家の秩序――として構想される。政治神学のほうからは政治哲学と近代の主権理論とが生じてくる。オイコノミア神学からは近代の生政治が生じてくる。その生政治は、今日における社会生活のあらゆる面において、オイコノミア[経済]と統治の勝利を見るにまで至っている。」(13)
「政治神学的パラダイム」「カール・シュミット」「「近代国家理論の重要な概念はすべて、神学的概念が世俗化されたものである」」、「オイコノミア[経済]は世俗化された神学的パラダイムであるかもしれないとするテーゼは、当の神学自体へさかのぼって作用する」(16)、「神の生と人間の歴史とがはじめから神学によって一つのパラダイムとして構想されていること、つまり神学はそれ自体からして「オイコノミア的」だということ、神学は単に世俗化を通じて後から「オイコノミア的」になるというのではないということ」(16-17)、「歴史とは結局、政治的問題ではなく「経営」や「統治」の問題だということ」、「キリスト教信者が求める永延の生はつまるところ「国(polis)」というパラダイムのものにではなく「家(oikos)」というパラダイムのもとにある」(17)

10．近代化・世俗化をめぐって：オイコノミアと統治→経済と政治？
「ヴェーバーにとって世俗化とは、近代世界のいや増す幻滅と脱神学化の過程の示す一面

である。それに対してシュミットにおいては反対に、世俗化は神学が現前しつづけているということ、神学が近代においてまさしく働きつづけているということを示すものである」、「神学的諸概念と政治的諸概念」「ある特有の戦略的関係」、「その関係は政治的諸概念をその神学的起源へと差し向けつつしるしづけるものである」（18）
「世俗化の問題をめぐる論争」、「ハンス・ブルーメンベルク、カール・レーヴィット」（20）